

吉備塚古墳発掘調査

吉備塚古墳調査委員会
副委員長 長友 恒人

▼ 吉備塚古墳 ▲

吉備塚古墳は一年中ササに覆われ、夏場にはクヌギの原木が茂る、大学構内の西北にある小さなこんもりとした丘で、吉備塚と通称し、吉備真備の墓と伝承されている。遣唐留学生、遣唐副使として二度に渡つて唐の地を踏み、当時トップクラスの知的リーダーであった真備の墓はいかにも大学にふさわしい。

奈良盆地の東には、桜井市から天理市にかけて纏向古墳群や大和・柳本古墳群と大型の前方後円墳を含む古墳が連なる。天理市を越えると大型の古墳は見あたらないが、古市から北へ若草山頂の鷲塚古墳



まで、小型の古墳が点々と連なっている。飛火野とアセビの森の境あたり、鹿苑付近には自然の地形と見紛うほどの小さな円墳がいくつもあ

る。吉備塚も奈良県遺跡地図に記載された古墳である。その頂付近から一九八六年に画文帯環状乳神獣鏡が採集され、花園大学が中心となつて測量も実施されている。古市にある古墳のいくつかも調査されたが、副葬品は盗掘されてほとんど残つていなかったとのことである。この中であつて、吉備塚古墳は手つかずのまま調査されていなかった。

▼ 発掘調査の開始 ▲

一九九九年の学部改組に伴つて、総合文化科学課程環境科学コースにあつた古文化財科学専修はあらたに、文化財造形専修と共に総合教育課程文化財コースとして再出発した。かねてから、大学構内にある古墳を文化財コースの教育に活用できないかと考えていたが、二〇〇一年に赴任した金原正明助教授は、遺跡調査の経験も豊富であることから、文化財コースの教育研究プロジェクトとして学術調査を実施することを企画した。墳頂付近で鏡が採集されたこともあり、遺構の攪乱や遺物の盗掘も予想されたが、そつであつ

ても、発掘調査の体験としては十分であり、クヌギの木を弱めることが少ない冬季に調査することも可能であると考えた。

調査の前に文化財コースの学生を対象として説明会をもち、授業の空き時間を利用して調査に参加する形で希望者を募つたところ、六割以上の学生が参加することになった。

クヌギの木の勢いが落ち着くのを待ち、二〇〇二年十一月二五日に墳頂を中心に東西南北に調査区を設定し調査を開始。調査に先だつて、リーダー探査と電気探査を実施したが、古墳の構造と遺物を明瞭に確認することはできなかった。

東の調査区では、表土下からビニールの破片が見つかり、掘り進むと瓦や煉瓦が出土した。さらに、灯明皿の破片や瓦の破片が煉瓦などに混じつて検出され、古墳の痕跡をほとんどとどめていなかった。古墳の築造から時を経て、人々の記憶から遠ざかると墳丘を掘り込んで土地利用をしたと考えられた。

西の調査区でも攪乱は見られたものの致命的ではなく、墳頂から九メートル付近で埴輪片が少しまとまって出土した。この埴輪片は古墳築造の時期を推定する手がかりとなるもので、五世紀後半と考えられる。



墳頂部には二基の埋葬施設があることが判明したが、詳細は不明のままに二ヶ月の調査を終えた。墳丘の大きさは不明であつたが、埴輪片の位置などから半径九メートル以上の円墳または前方後円墳の後円部であることがわかつた。出土遺物には貴重なものが多く、挂甲（鎧の一種）、鉄刀、鉄鏃の束と多数の鉄製品が主なものであつた。

▼ ただ事ではなくなつた二年目の調査 ▲

二年目は、墳頂部の調査区を拡張して埋葬施設を精査すること、南西部に調査区を設けて墳丘の範囲を確認することを目的として、十一月二五日に調査を開始した。

昨年度の調査面まで掘り上げるまでの十日間ほどは、ほとんど肉体力労働である。墳頂部の調査区は北

と南西を約一メートル、東を約二メートル拡張したが、東の拡張区ではアラカシの木が根を張つており、この木を除去しなければ埋葬施設の詳細を明らかにすることは不可能であつた。以下、この時期のメモを日誌風にまとめてみる。

- 12/10 墳頂部、挂甲精査、アラカシの根を完全除去。
- 12/11 墳頂部、挂甲精査、アラカシがあつた周辺の表土剥ぎ。午後、雨のため遺物洗い。
- 12/12 調査委員会・第一埋葬施設の調査は保留し、第二埋葬施設を優先して調査、一ヶ月の期間延長などが決つた。墳頂部、挂甲精査。墳頂部東、鉄製品(鏃?)を取り上げ。
- 12/13 墳頂部東の石を取り外し、下からまた石。墳頂部、挂甲精査。アラカシ根元、以前に鉄製品が出土した下から鉄製品が出土。取り上げ。墳頂部東の精査。WS区(南西の調査区)掘り下げ。
- 12/15 墳頂部東、精査、掘り下げ。墳頂部、挂甲精査。WS区、表土剥ぎ。
- 12/16 墳頂部東、掘り下げ、三累環頭大刀を検出。墳頂部北精査。墳頂部東、三累環頭大刀周辺を徐々に掘り下げ、土は土嚢に入れて保管。墳頂部の鉄製品(鉄刀?)の先端部分が一部露出。WS区掘り下げ、及び壁出し。
- 12/17

十二月十六日に検出した大刀を竹くしで慎重に精査していくと、柄頭は神像の中にはめ込んだ珍しい三累環頭であることが判明した。その後、見学に訪れる考古学者が跡を絶たない。見学された先生方から、三累環頭大刀に関する文献を教えただけでなく、三累環頭大刀は、日本で四〇例ほど出土しているが、ここで出土した大刀は他に類例がないようである。

目前に年末年始を控えて、大刀を取り上げるべきか、埋め戻すべきか、判断に迷ったが、盗難の危険がないとはいえず、思い切って取り上げることに決め、ギブスで固定したうえで、十二月二五日に取り上げた。

御用納めは済んでいたが、事が事だけにのんびりと構えるわけにも行かず、十二月三〇日に奈良大学の

西山要一先生にお願いして、X線写真撮影を行った。

現像が終わってフィルムを見ると、「すげえー！象嵌だー！」、「六個もあるー」。X線撮影では刀身の両面の象嵌が重なって写るので、図柄が明瞭ではないが「龍」と「虎」らしいものは、間違いない。西山先生が正月返上で片面ずつトレースをした結果、一面に人物像（神像）、龍文、花文、もう一方の面にも人物像（神像）、虎文、花文が鮮明に象嵌されていることが判明し、この大刀がさらに貴重なものであることが分かった。

大刀に詳しい研究者の所見や文献で見る限りでは、大陸にも類例がないらしい。ただ事ではなくなつた。これから先の作業はレベルの高さが要求されることとなる。

正月明けに、奈良県と奈良市に

応援をお願いすることにし、樫原考古学研究所の佐々木好直さんと奈良市埋蔵文化財センターの鐘方正樹さんが現場作業を手伝ってくださることになった。授業と会議の合間を縫ってしか現場に立ってない状況から、経験豊かな二人の調査員が終日作業をしつつ指導をするという態勢になって、調査は急速に進展し、二基の埋葬施設の切り合いも判明した。

南西部の調査区の様子から墳丘は直径約二〇メートルの円墳または全長約四〇メートルの前方後円墳であると推定された。

一月二六日に考古学の先生方と三累環頭大刀の学習会をもつたが、調べれば調べるほど貴重な遺物であることが明らかになってきた。記者発表を行った翌日（二月五日）の各紙は一面で扱った。新聞で大々的に報道されたこともあってか、七日に

行った現地説明会は千人ほどの市民が参加する盛況であった。

この調査で、二基の埋葬施設のうち、北側の施設は六世紀の割竹形木棺直葬であることが明らかになった他、三累環頭大刀をはじめ、小札、鉄刀、馬具、鉄鏃、ガラス玉、朱などの貴重な遺物が出土した。調査は今後も継続される。

▼これからのこと▲

二年に亘った発掘調査で、埋葬施設と墳丘の状況がほぼ解明され、貴重な遺物の数々が出土したが、これからの作業が大変になった。第二埋葬施設を精査した際の遺物



の整理、保存処理、保管を含めた一連の作業と報告書の作成などを数少ないスタッフで行わなければならぬ。

二月十四日に調査区域のフェンスを撤去し、墳頂のお地藏さんにコップ酒をお供えしながら、これからのことを考えると頭が痛かったが、可能ならば、三累環頭大刀をはじめとする貴重な遺物と、調査の成果を市民に常時公開できるようにしたいものである。

一人のけが人を出すこともなく、重要な遺跡の発掘調査ができたことは幸運であった。調査にご協力いただいた学内外の方々から心からの感謝を申し上げます。

